

小袖さん

廃校の梅雨黴久し長廊下

深吉野の瀑布真白にたぎちをり

塔仰ぐ女人高野の青嶺濃し

『一回目の吟旅を終えて』

この度の吟旅を企画して下さったみのるさんにまずは、お礼申し上げます。

ゴスペルは雨に強いというジンクスが生まれそうな程良い天気の良い吟行ができました。石鼎庵の隣にある廃校舎は、入ると昔懐かしい黴の匂いと長廊下がすぐ目に止りました。廊下は中学生の時走った五十メートル走のコースのようにも見え故郷を思い出しながら最初の句が浮かびました。

第二句会が終わり安堵しながら山道を下っていくとパワースポットのような苔むした丹生川上神社に出ました。千年杉の精気や如何にと木に耳を当ててみました。が何も聞こえずに残念！

そして誰かの振る宮鈴が梅雨湿りで音の出なかったのが妙に印象に残りました。

この吟行で思い出に残るのは、梅雨で雨量が増した滝を前に立ち尽くした時の句で雑念の入る前にすっと五七五に整いました。考えて見るに無理な言葉探しをしなかったのが良かったのかもしれない。

滝の裏に廻ると小さな水神様の祠がありここは風間の肝試しでも一人では来れないなあなどとすぐ余分なことを考えている自分に苦笑しました。

天好園の広い庭とゆったりとし大広間での鯉料理の夕食、そして蛭見と楽しい一日はあっという間に終わりました。

明日香の吟行に比べてすいぶんと気持ちに余裕があり体験を積んでゆくことの大切さを学んだ気がしました。

多詠多捨が苦手な私は、今回は自分のペースを崩さずに静かに吟行することを念頭においていましたが、二日目の室生寺・大野寺あたりでは集中力も途切れていたようです。

しかし新しい五重塔は見ようと思えば急な石段を登りました。後日みのるさんの添削で塔の句が見違えるほどになり好きな三句の中に入れさせていただきました。

以前角川の雑誌で俳句は師に添削を受けることにより上達していくのでよい師を選びなさいと書かれているのを読んだことがあります。ゴスペルはまさにそれだと今回の吟旅を通じて感じました。



ぼんじりん

雨粒の朝日に光る蜘蛛の糸
若楓川霧に枝重ねけり
岨の道辿ねばしづく神の滝

『蜘蛛の糸』

昨年の明日香吟行は、一日のみの参加でしたので「泊吟行は今回の吉野が初参加です。私は特に即吟が苦手で、句作りにはあせりと語彙の貧しさを感じてしまい、肝腎の物をよく見るといことが少し欠けていたように思います。

今回の吟行で印象に残ったところといえば石鼎庵の近くの公民館（廃校舎）の書庫に俳句の本がびっしり本箱につまっていたこと、また天好園の庭にはたぐさんの句碑が立ち並び、売店のおばさんも俳句の本を携えておらね、まったくもって俳句村という感じがしました。

夜は童心にかえったかのように目をこらし暗闇の螢を追ったこと、大阪の都会の夜では蛍など何十年も見ることがありません。そして、東の滝、投石の滝、どちらも梅雨最中のせいでしょうか、水量の豊富さは豪快そのものでまわりの植物の生育や渦巻く川の流れに思わず手を合わせたくなる豊かな神の滝でした。

室生寺、大野寺では時間がなかったのが少し残念でしたがとても印象深い旅行となりみのあるさんには感謝しています。



ひかりん

螢保護札立つ川の涼しかり
な滑りそ苔むす梅雨の石橋に
終焉の遺詠の句碑は下闇に

『初吟旅』

梅雨最中の吉野吟旅でしたが雨もあり、日差しもありの天候に恵まれたものになりました。

俳句を詠む旅は初めての経験で、時間に追われての五句提出に気があせり、そして句会にも集中力を維持できず作品にもむらがあててしまいました。

でも参加して良かったです。句仲間とのふれあい、吉野の自然、山の滴り、濁りのない激つ瀬、飛び螢、杉美林、水量の増した轟音の滝等々愉しかった思い出は数えきれません。

貴重な体験のお世話をいただいたみなさまに感謝、そして送り出してくれた夫に感謝の吟旅でした。



せいじけん

山の香の満つる川辺や河鹿なく
さしのばす手にみ吉野の姫蛭
滝の水 息入れて瀬に向かふ

『授かる俳句を指摘して』

梅雨の最中ではありませんでしたが、よい天候に恵まれ、また、遠方からの方々と親しくお話ができて楽しい吟旅となりました。昨年の明日香吟旅の時と比べると、少しはましな俳句ができるようになったのではないかと思えます。これもみな、みるさんやゴスペル俳句に集う皆さんのおかげと感謝しております。披講をさせていただいたことも大変勉強になりました。

読めない漢字を覚えたこともそうですが、それ以上に、皆さんの俳句を大きな声で読み上げることによって、音の響きから来る俳句の別のよさを味わうことができました。披講者の特権ですね。

満目の緑、滴る水、早瀬、苔むす石碑、草庵、昔懐かしい木造の校舎、蟻地獄、杉木立、梅雨の滝、朱塗りの吊り橋、山法師の花、句碑、河鹿の声、蛭、老鶯の声、夏の草花、等々、思い出すだけでも、俳句の題材は豊富にありました。

しかし、第一句会では、久し振りの吟行ということもあってか、自分で納得できる俳句がなかなかできませんでした。選句の際に皆さんの俳句を読ませていただいはじめて、今ここで見たり触ったりして感じたことをそのまま素直に具体的に読めばよいことに気がきました。

そのおかげで、第二句会、早朝句会、第三句会では、力まずに納得のできる俳句ができるようになりました。もちろん俳句の巧拙は別ですが。

ところが、吟旅二日目の室生寺以降、俳句がまたできなくなりました。句

会があとに控えていないから気力が失せたのか、暑さに負けてエネルギーがなくなったのかと、いろいろ考えました。

吉野吟旅が終わって毎日句会の俳句を作ろうとする際にも、納得のできる俳句がなかなかできません。意識はしていませんが、何か別のことに心を奪われているのかもしれない。という訳で今は悩みの中にいます。

こういうときは、みるさんのおっしゃるように、心を空っぽにして対象に向き合い、授かった感動を素直に俳句にするよう心掛けなければならぬのだらうと思います。ともあれ、みるさん、皆さん、今後ともよろしくお願いいたします。



菜々さん

天誅組忍びし歌碑は梅雨しとど
旅の膳鯉の洗ひを花と盛る
岩走る丹生の玉水みどりさす

『吉野そとろ』

梅雨晴れの六月二二日、愈々吉野吟旅の始まり。皆さまのこやかな笑顔に意気込みもちらり。初めての東吉野に期待が膨らむ。特に天誅組終焉の地とこのことでネットで下調べ。ところがこれがどうもよくなかった気がしました。

尊王攘夷を掲げて勇み散って逝った志士たち。幕末の動乱に高い志を持ち捨て身で生き切った若者たち。そんな天誅組の事が心を占め何を見てもそこに気持ちを繋げてしまふ。四苦八苦、ようやく出来た一句です。互選での名乗りも一回切りというありさまでした。

予備知識は時に作句の邪魔をする。手持ち句は皆さんの感動を得られない。吟行地に立てば心を空にして対象と向き合ふ。これらは日頃からみのあるさんに教えられることばかり。なるほどと納得、反省しきり、心も梅雨しついでした。

次は吉野をこよなく愛したという原石鼎の庵。有名無名の俳人が多く訪れるのも頷けるたすまい。あせり心のつらさに、ここで第一回句会が終わる。鬱蒼とした緑の木立の中、滝が神様という丹生川上神社へ。小さいながら、ほんに白妙の美しい滝。ここで、句授かる。

今夜の宿天好園に到着。手入れの行き届いた庭園を歩き温泉へ。愈々待望の夕食。吉野の食材を使ったとどろの料理と女将の笑顔に楽しいひととき。薄桃色の鯉の洗いが花のように。ちょっとオーバー！盛られ頭の中に一句が浮かぶ。やれやれ・・・

ようやく暗くなり螢狩りへ。何としても一句を作るぞ、
丁度一匹が荘の方へ。よし、人恋螢としようかと、句。

おちおち螢も眺めてはおれません。第二句会の大広間へ。吉野鮎の姿焼きを詠まれた方、大梁に手斧の跡を見つけた方も。落とし文、あっぱっばなど思いもよらない季語も。すごいなあと思う。やっと長い二日が終わる頃には、深吉野の嵐気も深まるようでした。

二日目 雨音が目覚める。前池では蛙が低い声で時折鳴いている。雨も又よしと皆さんもう俳句モードで園庭を散策。程なく雨も上がる。朝から上げ膳据え膳、主婦にはなんともうれしいこと。

今日は先ず投石の滝へ。十五mの高さから圧倒されるばかりの水量を直下。その飛沫に身も心も洗われるよう。丹生の滝もこの投石の滝も何とも神々しく、岩を走る水の何とききれいなこと。まことに玉水というにふさわしいと、先の一句を得る。

天好園に戻り第三句会。滝飛沫、滝壺、滝音、滝風、滝宮、滝不動、滝道、瀑布等々。一つの滝がこんなに多くの言葉で詠まれていて驚きでした。

愈々最終吟行地室生へ。いつ来てもあの磨崖仏、大好きなところ。ここでこの句は後日選をいただきました。マイクロボスでの吟行、ほんとに感謝です。駅前でしめくくりのコーヒーも。

しつとりと緑に染まりながら杉美林をはじめ滝を瀨を詠み、螢、河鹿、蜘蛛、蟻地獄、神ほとけ、墓と何でも句にしてしまう皆さま。圧倒され、感心しきりの楽しい吟旅でした。遠来のみなさま、又お会い出来ますように。みのあるさん、皆さん有難うございました。



よし女さん

石鼎庵三和土に揃ふ梅雨の靴
更けてより始まる句座や河鹿鳴く
青畝碑の傘となりたる山法師

『山法師の宿』

「わー」杉美林の底ひをくねくねと走って来たバスのエンジン音が歓声の塊に変わりました。わたしも心で叫んでいました。宿の天好園は山法師の花浄土です。これだけの数、開ききった艶やかな雪白の立ち姿。この風景を見られただけでも三刀殿と元気に参加出来たことを感謝しました。

四回の句座はずっと緊張の連続でしたが不思議と気持ちに焦りはありませんでした。成績はゼロかもしれないけれどとにかく吟行と言うこの得体のしれない物の何かを掴みたい、そう思っていました。

会の雰囲気は和やかで団体行動にあまり慣れない私もすーっと入って行けました。同じ経験の表現を即刻添削されるのでなるほどと大きく頷けます。披講をじっと聞いていると良い言葉たねとか、あのように表現するといのねとかが感心しきりです。いつも思うことですが、あれほどの俳句に息を吹き込むの皆さんの手腕は宛ら最高の心臓外科医だと頭が下がります。

いきなり指名された早朝句会の披講、愚かな失敗は今思い出しても可笑しく恥ずかしく、あれほど揚ってしまっただ自分がいとしくも思えます。気分は校長先生の前に正座して道徳のお勉強をしているようでした。ただ文字を辿っているだけと言うような状態。披講によって「句が沈んでしまうと耳にしたこともあり申し訳なく思っております。これも良い経験になりました。

吟行は心を無にして感動を見つけることだと何度も教えていただきましたながら、

私は全くあやふやでしたね。吟旅を終えて「みのるの日記」に書かれていたメッセージに、鈍い私もはたと気付きました。曖昧な感動ではなくて具体的に感動し、その感動を十七文字に翻訳すること「これってすごい言葉ですね。

帰宅して六日後二人吟行をしました。どのくらい具体的な感動を得ることができるか試して見たく滝の落ちる山口一の古刹に出かけました。具体的に感動すること」と何度も呟きながら・・・
吉野の山とは似て非なる緑でしたがそれなりに発見もあり楽しみました。でも感動の翻訳は大変な作業です。

吉野の吟旅を終えた今、これまで対象物を片目でしか見ていなかったことを実感しました。心の両眼をしっかりと見開き具体的な感動を得るまでは動かない。私の心の中には何かを掴んだような感覚があり、覚悟らしき物も芽生えているようです。

遠隔地からと歓迎していただきお世話になりました。ばなしで本当に有難うございました。奥様にもお目にかかれて嬉しかったです。季節が巡って山法師の花を見ると天好園を思い出すことでしょう。

みのるさんをはじめ奥様、GHの皆さんお元気でいてください。
いつかまたお会いできるチャンスが巡ってくることを祈りながら・・・



三刀さん

深吉野の空へ孤高の螢かな
滝の威に押され誰もが無口なる
夏霧の晴れて深山の巖深し

『東吉野吟旅に寄せて』

昨年の五月、奈良の吟行に飛び入りさせていただき、今回は一度目の参加である。以前に至生寺を尋ねたことがあるが、女人高野の記憶のみで全てがセピア色に霞み思い出せなかった。

楽しみながら自然に向き合い、句作りの原点を学ぶというチャンスは健康や年齢を考えるとそう何回もある訳が無いので、少し遠いが是非にと思い立った次第で、当日は五時に起床しJR宇部線、新幹線と乗り継ぎ、予定通り近鉄榛原駅で、みのるさんを始め皆さんにお会い出来た。

事前に知らせて頂いたタイムスケジュールに合わせ、限られた時間の中で良くて悪くても投句する。楽しむ余裕というよりこの緊張の中で、ある人が瀬音の川を眺めながら、『この景をどう表現したらいいの』と自問自答されていたが、とても印象深く今も脳裡に焼きついて離れない。五感を働かせ集中と直感が大事と常々聞いているが中々上手くない。

私は吟行中にと感じたものをメモ帳に書きとめていたが、この走り書きは、自分でも読めないことが多い。しかし、これが推敲の段階では大変役に立った。今回の句会はずべて五句提出であったが自選、二句、三句となると更に難しくなる。

もう一つは推敲の段階で、例えば「風起る」を、もう少し掘り下げ「風見ゆ」と言うように、感動をより具体的に、見えるように表現することを学び、大きな収穫であった。

それにしても、皆さんの俳句に対する真剣な姿勢に圧倒され、帰宅後、旅の余韻を引きずりながら今回の「みのる選」を改めて見ると質の高い佳句揃いで、これまでのご指導の成果だと感心した。

この二日間は天気にも恵まれ天好園のマイクロバスのお陰で、吉野の杉美林や滝や川も存分に見せて頂いた。そして東吉野の人々は、私共が経験した六〇〜七〇年前の暮らしをそのまま引き継ぎ、維持されている様で本当に懐かしくもあった。

だが、少子高齢化や過疎化の今、往時の小学校は民族資料館に様変わりし、そこに陳列されていた杣の暮らし向きや道具が何世紀か前の展示物や出来ごとの様に錯覚した。

また、先人が残されたあの美林が、時代の流れの中で取り残されている様で心が痛みました。

その一方で今でも、古都奈良のその昔と変わり無く、山の神、水の神を大切にされている杣の暮らしを垣間見ることも出来た。

この吟旅は、句づくりという目的のほか、豊かな暮らしとはどんな暮らしか」と反省して見る良い機会の様にも感じた。皆さん本当にお世話になり有難うございました。



いすもすわん

杉美林縫ふ深吉野の瀬の涼し
神の滝ミストとなりてしびきけり
夏山のとっぺん雨に煙りけり

『吉野吟旅を終えて』

参加者全員が雨を覚悟していた今回の吟旅、やはりメンバーの熱意に雨雲が退散したのかいつもここところというところで雨が上がり、絶好の吟旅日和に恵まれた。

提出句は五句。去年の明日香の十句より少なくて組みやすし・・・と思ったのが大きな間違い。五句のみの提出は、熟練の皆様は推敲に推敲を重ねられ、より格調高く巧みな句のオンパレードでした。

適切な単語が出てこない、言葉をつなぎ合わせても俳句の形にならない・・・同じ時間をかけて同じものを見たはずなのにあんなに表現力に差が出るなんて・・・など葛藤の連続。不勉強の私は力量の差をまざまざとおもいらされた二日間でもありました。でもどれもこれも日頃の訓練不足の結果であることは間違いありません。

吟行の心得も何度も読み返したつもりだったのに実行が伴っていないから、ついつい悪い癖が出てしまいます。反省点だらけの今回の吟旅でした。とはいってもまだまだ経験不足の私ですから当然といえは当然の結果でもあるわけです。楽しかった思い出をステップに気持ち改めてまた第一歩から勉強、訓練のしなおしです。

但馬も緑濃く山深いところですが、一味もふた味も違う吉野の山々、杉美林を堪能、猛々しく豪快な滝、歴史上の事件現場、女人高野と呼ばれる室生寺、大野寺の磨崖仏、つり橋、すべてが印象的でした。マタタビ、大山蓮華、箱根空木などいろいろな珍しい木や花の名前も教わりました。

お名前しか知らなかった遠方の方々ともお会いすることも出来、今後の毎日句会、ゴスペル句会、不二句会とのお付き合いも、一層楽しくなりそうです。

宿の心尽くしのもてなしにもとても暖かいものを感じました。そしてみるさんはじめ、こまごまとした準備や心遣いをくださった皆様に感謝し、句材いっぱいのところへいきながら句に詠んであげられなかった自分の非力さ加減を反省しながら今回の吟旅の感想とさせていただけます。又機会があれば何処であろうと懲りずに参加したいと思っております。



百石さん

目を閉じて聴く激つ瀬の音涼し
杉美林抜けて夏日の燦々と
万緑の何処に佇ちても沢の音

『水の音』

みのるさん、皆さん、吉野「泊吟行いろいろとお世話になりましたありがとうございます。温かな輪の中に入れて頂き感謝いたしております。今回初めてお会いした方もいらっしゃいました。毎日句会でお名前は存じてはいましたが、今回お会いできてぐっと身近に感じました。

私が選びました三句は、みのるさんに添削を頂いた句です。私は、力不足、集中力不足のうえに語彙も少なくお恥ずかしいですが俳句は大好きです。みのるさんに添削、ご助言を頂けますことにも深く感謝しております。

今回の吟行で「番印象深かったことは、第三句会で、せいじさんが披露してくださっているときに老鷹がまるで私達に挨拶をするかのごとくに大きく、力強く長く啼いてくれたことです。あまりの美声にみなが聞き入り、「瞬間座がしんとなりました。」

石鼎庵のお堂の縁の下にいた蟻地獄も初めてで見入りました。また、何処にたってもよい景色、よい空気、心和む瀬音、神々しい滝、山の靈気をも素晴らしいと感じました。

宿のお食事も美味でした。天好園の黄昏時の山法師の花の白さも室生寺の一樹の純白の石楠花にも見入りました。万緑の中ほんとうに心洗われる二日間を堪能しました。お世話くださった寝屋川の皆さん、披露してくださいましたせいじさん、成績をホームページに掲載してくださいましたうつきさんに感謝しております。

よこすけさん

爺婆の石苔むして梅雨じめり
万緑の山また山や奥吉野
青嵐塔の九輪の傾ぐかと

『奥吉野伝説の山を吟行して』

みのるさん、吉野吟旅大変お世話になりました。私たちは、あちこち連れて行っていただき、美味しいお料理、温泉と蛭狩り、そして句会と充実した時間を過ごさせていただきましたが、みのるさんは計画から皆さんを案内、そして俳句の添削とご苦労だったとおもいます。

吉野の杉林の美しさは、行けども行けども杉の山がつづき、夜来の雨で緑濃く感動しました。丹生川上神社の爺婆の石をさわれば夫婦円満だとか面白い句材だと思いましたが難しかったです。添削ありがとうございました。

二日間で三〇句作りましたが、最後は疲れて拙い句ばかりになってしまいました。室生寺の傾いた九輪塔、佳い句に添削して頂きよろこんでおります。思いで深い吟旅ありがとうございました。



うしむれん

びっしりと十薬味かせ薬師堂

日射すとき虹現るる神の滝

万緑の森深閑と思惟仏

『万緑の吉野吟旅』

梅雨真っ只中の吟旅、大して傘もささず実現できた事に先ず感動しています。今こうして吉野の余韻に浸れるのも偏にみのあるさんのお陰と感謝しております。今回は遠方の方、みのあるさんの奥様とも一緒に楽しさ倍増でした。バスに乗った時から遠足気分で大誅組終焉地、石鼎庵と俳句モードになれず段々と焦りが出ていた様に思う。

一旬目の十薬の句は茅葺の薬師堂での句、堂縁の下、日の届くか届かない所に十薬がびっしり咲いていた。ここは雨もあたらず蟻地獄があるほど乾燥しているのに、生命力の雄雄しさに感心した。お薬師さんに十薬とは面白いと思ひ授かった句です。

杉美林に囲まれての吟行、吉野杉は根元から先の方まで丁寧な枝打ちによって太さが一定だそう。整然と杉の植林された山々は鉾を見せ、幹を見せこれはやっぱり杉美林と美をつけないと失礼だと納得した。また今回訪ねた二つの滝も万緑の中、正しく神の滝で飛沫に禊を受ける感じであった。

二旬目はひんがしの滝での句、轟音と水煙がして虹が現れたのを詠んだが、上五の水煙にを 日射す時 に添削頂いた。すると照り驕りて虹が消えたり現れたり情景が見えて神の滝にもびっしりになる。深く心を通わしながら観察することは、こういふことだと会得でき鍛錬会の賜だ。スランプに陥った時はこの句を思い出すことにしよう。

三旬目は最後の力を振り絞って登った室生寺の如意輪観音様を詠んだ。本堂の奥まったところに半跏思惟のお姿で、万緑のひっそりとした森が分け

ても思惟を深めている様に思えた。

今回この三旬のみならず添削によって生かされた句ばかりである。右を見ても左を見ても句材には事欠かなかったのに、心を無にして深く対象と向き合っていないかった。句づつ仕上げていかなくはと思ひメモも疎かになっていた。この二つが一番の反省点であるが、みなさんの佳句でとても良い勉強をさせて貰えた。

庭に幾つもの句碑がある宿で、行き届いた持て成しと杉をふんだんに使ったお座敷での句座、とても有意義で楽しい吟旅であった。みなさん有難うございました。また、これからの毎日句会も皆さんのお顔が見え一段と楽しくなりそう。



満天さん

万緑を朱の吊橋が繋ぎけり
黎明や一山つつむ夏の霧
若葉映ゆ天誅義士の辞世碑に

『万緑裡』

大自然は私たち吟行子にその時、そのときを取計らってくれたような気がしました。深吉野の果てしない万緑の美しさ、蛍の繁殖する美しい川、この土地でないと出会えない木々や花々を目の当たりにすることが出来ました。

梅雨の時期がかえって幸いしたのでしょうかどの滝も迫力があり、しばらくこの場に居れば自分を浄化してくれるような気になりました。ぜひ、このような美しい景色を後世に受け継いでいってほしいものです。

天好園の女将さんの人あたりの良い話上手な方、お料理も最高でした。俳句を詠む人なら一度は尋ねてみるところでしょうね。原石鼎庵の近くに今年五月十四日句碑建立の宇多喜代子の「全国はここかも知れず蓬つむ」に蝶が舞っていたのが印象的でした。

みのあるさんが万端準備してくださった今回の吟旅、俳句は出来ませんでしたが大満足させて頂きました。有難うございました。次回を楽しみに致しております。



しんじゆん

蛍観て旅の心の深まりし
滝壺に吸ひ込まれさう音激し
国宝の堂深閑と杉涼し

『杉涼し』

今回の吉野は、反省の「泊旅行でした。どの句会でも時間内に句がまとまらず気ばかり焦って落ち着けませんでした。これからの教訓にします。

今回は、滝も素晴らしかったですし蛍にも出会えて良かったです。みのあるさん、みなさん、有難うございました。



きじなさん

三光鳥杉の美林を鳴きわたり
山宿に句会を重ね明易し
鏝坂汗ぬぐひつつ塔仰ぐ

『深古野』

集合時間に榛原の駅へ着くともう皆さんお揃いで急いでバスに乗り込む。
一路東吉野村へと。地図を片手にあっち見こっち見ときよろきよろする。
毛皮や剥製の店がある。市街地を抜け青田が続きやがて山あいへ。緑の中
に木天蓼や山帽子など白い花が真っ盛り。

そしてまづ天誅組終焉の地でバスを降りる。万緑と美しい水に圧倒され、
全身が緑色に染った感じがする。感動して佇んでいても一向に句は出来な
い。ここから少し後戻りした所に最後の日本狼を捕らえた所があるとパン
フレットに記してある。ちょっと行ってみたい気がする。

次は石鼎庵へ。開けた地形に建っていて目前に美しい杉山、その裾を流れ
る川、庵の中は昔懐かしいお籠さんや井戸流しのある土間の通り庭、近く
に廃校になった古い校舎、高らかな鳥の声、とりどりの花、いつまでも
んびりと見ていたいが句会が迫っている。第一回終了。

次は少し歩いて丹生川上神社へ、正に水の神様、清い水がふんだんにある。
東の滝ではみずのは女神に会えるかと思えるほど水の靈気を全身に浴びる
ことが出来た。

いよいよ天好園へ。広い庭である。女将さんはとても気さくに迎えて下さ
る。石鼎庵の世話人の方との会話もそうであったが、みのあるさんと女将さ
んの会話を聞いていると今までのお付き合いの程が伺われてみのあるさん
のお人柄に感心する。おかげで私達にも良くしていただけた。すぐに温泉と
食事。そしてこの旅で一番楽しみにしていた蛭狩りへ。勇んで出かけたが、

懐中電灯を持っていなくて先へ進めず。結局庭内で一匹見たのみ。後でケ
ータイをかざして行けば良いと聞いたが後の祭り。句も読めぬまま句会
となる。

翌朝、投石の滝では明け方にとっと降った雨で堂々の水嵩。ここでもひた
すら濡しびきを浴びていたが句作に追われる。滝壺に石を投げてみたい
などと、不屈な思いを持った罰か。句も浮かばない。園へ帰って第三回
目の句会。

この吟旅で私が一番感じ入ったことは天気である。予報では二日とも雨と
のことであったが、まづ天誅組墓所では義士を悼むことのしと雨。石
鼎庵の開けた景致では晴れ。蛭狩りには程良い曇り。投石の滝では早朝の
激しい雨に水嵩の増した滝を快晴のもとで見物と。吟行の場所場所に合っ
た天気を賜ったことは本当に不思議な事と思った。みのあるさん良い企画を
していただき有難うございました。



わかばさん

静けさや鳥語しぎりの里若葉
木下闇抜けて丹生の瀬浴々と
万緑の中に激つ瀬響きけり

『吉野吟旅に思うこと』

吉野はどこへ行っても豊かな水と杉美林の世界でした。

マイクロバスのお陰で難なく、山深い天誅組終焉の地、原石鼎庵へ導かれ、宿特製のお弁当を頂き第一回目の句会、二句目の句が授かりました。

その後丹生川上神社、東の滝へ、どこまでも杉美林の中、又豊富な水にあふれどの場所に立っても人知の及ぶところでないものを感じずにはおられませんでした。宿に着くと温泉に体をほぐし、広い庭園の散策、申し分のない夕食、楽しみにしておりました蛍の夜は、童心に帰り蛍の火を追ったものでした。その後二回目の句会二句目の句が授かりました。

二日目、傘をさして庭に下りましたが、次第に雨も上がり、山にかかった霧の薄れゆくのがとても印象に残っています。グループの句会は互いに忌憚のない話し合いが出来て楽しいものでした。三句目の句が授かりました。いずれも添削をして頂き命を得ました。

投石の滝では、写真を撮って頂き良い記念となっています。老杉の大木が滝を見下ろし、飛沫が森の木々や岩を潤して滴り、清々しく去りがたいものでした。第三回目の句会に於いても皆様の感覚の鋭さや目の付けどころなど、盛り沢山の佳句に驚くばかりでした。この句会の終わりがころ老鸞の声を心行くまで聴く事が出来ました。

鰻のお昼もおいしくペろりと頂いてしまいました。吟旅も終盤に入り、室生寺、山門を入るとすべ、もりあおがえるの泡状の卵塊を珍しく見る事が

でき驚きました。又鎧坂を登り杉木立の中椋皮葺の屋根に丹塗りの組物が緑の中に美しく見えるところまで登りました。後はお堂横の階段に腰をかけて一息を入れたのでした。そして宇陀川の対岸に弥勒魔崖仏を見る事ができました。

この吟旅での反省として、集中力のない事、心を動かされるまで、時間をかけて観察する事、具体的に感動を捉え素直に表現する事、との教えに皆中途半端で何もできていませんでした。今後の学びの中で自分らしい句がいつかは作れるものと思ひ、続けていかなくとは思ったものです。

最後になりましたが、この何もかも素晴らしい吟旅、周到な計画のもとに導いて下さったみのあるさん本当にありがとうございます。今後もししくご指導下さいませ。一緒に下さった皆様楽しい吟旅でした有難うございました。



かれんさん

三川の落合ふところ滝激つ
黄昏になほ白々と山法師
老鶯の声高まりて句座佳境

『老鶯』

先づ、この吟旅を企画して下さいましたみのるさんに御礼申し上げます。旅を共にしました皆様、お世話になり有難うございました。

天誅組終焉の地から始まり大野寺の磨崖仏までの二日間、正に俳句の鍛錬会そのものでした。鬱蒼した杉美林、恐ろしい程の水かさの滝や川、東吉野を愛した俳人の庵、維新の魁に散った天誅組の無念の地。

神秘の森に建つ幽玄の寺、室生寺の優美な仏さま、雨水をたっぴりと含んだ山と川の靈気あふれる美しさに声もなく、改めてこの国に居る幸せに感謝しております。これも梅雨最中の旅に得られた賜物と思います。

今まで降っていたのに、ここぞとゆう時はさっと止む、この間の良さは・流石、ゴスペル句会の皆様、みのるさんの奥様のお蔭かもと思います。

次から次への感動の昂りの続く中、これを表現できない自分が情けなくなりません。今後も美しい日本語を正しく用い「読して意味が分かってもらえる様に、自分の句を作って行きたい」と思っております。有難う御座いました。



なつきさん

梅雨の傘たたみて墓の義士悼む
赤やかん石に置かれし山清水
滝の道辞さむ別れの深呼吸

『赤やかん』

この吉野吟行は心に残る日々となりました。

毎日句会の再開を喜び、参加させていただき幸せな毎日に加え、新しい仲間とご対面して俳句三昧・・・
みのるさんと集まっている仲間の俳句に対する姿勢がとても刺激的でもありました。料理も美味しく、鯉こくの珍しく、お部屋でおしゃべりも少しして修学旅行のようでした。

即吟はあまり経験がなく、第二回句会はすでに集中力が途切れ、成績は撃沈でしたが勉強になることばかりでした。同じ景色を見ているので違いがわかりやすいのです。

杉美林、またたび、滝、蛭。どれも私の住む地域ではお目にかかったことがない風景でした。もっともっと受け止める力と表現力があたらどんなに良かったことかと思えます。俳句が楽しいものだ、と再認識した吉野吟行でした。



有香さん

万緑の底ひを進むバスの旅
激つ瀬の同音異語や出水川
夏霧の静かに川面なでてゆく

『万緑に溶け込んで』

この度二回目の吟旅に参加させて頂きました。目的地の吉野は私の生まれ故郷に程近いところながら、一度も行ったことのない所ばかりで感激致しました。榛原から天好園のマイクロバスで、杉美林の中の一本道を進んで行きました。まるで万緑の底にいるのだなあという感じがしました。

最初に着いた天誅組終焉の地は、苔むしたうっそうとした所で、志半ばで散った義士達の暗い怨念を感じました。小さな古い橋があつてそれに「石の水橋」という名が付けられおり、面白い名だと思つて、句帳に書き留めました。残念ながら句にはつながりませんでした。

今回の吟旅で印象に残つたのは、自然のすばらしさでした。杉美林の森林浴も一杯出来ましたし、またたびや山法師の花、カワセミの声を聞き逃したのは残念でしたが、イカルの声には出会えました。滝の轟音は白い姿と共に今も脳裏に残っています。

いつも言われていることが、頭に浮かびました。自然をよく見て自然の言葉に耳をかたむけなければと、つくづく思いました。句は思ったようには出来ませんでした。作句姿勢など少しは考えるようになったと思います。みのあるさん、皆様有難うございました。



あとがき

『一期一会』

やまだみのる

たくさんの方が感想文を寄せてくださって心から感謝します。今回の吉野吟旅は僕にとってもとても思い出深いものでした。

梅雨最中でありながら天候に恵まれたこと、宿泊した天好園のサービスがとてもよかったことなどもその理由の一つですが、何よりも嬉しかったのは、参加されたみなさんが苦吟しながらも今回の吟旅でそれぞれ確かな何かを得られたということです。なぜなら、毎日句会のみのである選をさせていただき皆さんの作品に顕著にその変化が現れ始めたことがわかるからです。

せいじさんは、吉野吟旅のあとなぜか句が詠めなくなったそうです。これは、僕にも経験のあることで、「考えて作る」から「感じて詠む」という習慣への転換期であることを意味します。考えて句をひねるというプロセスが何となく虚しいものかと思えてきて満足感を感じなくなるのです。つまりこれはとてもよい傾向なのです。

そのよい傾向を確固たる姿勢へと定着させるためには、今まで以上に吟行が必要ということにもなります。このような体験を何度か繰り返しているうちに、やがて、吟行に行かないと句が詠めない、吟行にゆけばなんともなる・・・というように変わってきます。これこそが紛れもなく私たちの進むべき道なのです。

参加されたみなさんは、すでにその進むべき道への入り口を見つけていられます。せっかく入り口まで到達しているのに、あれこれ迷って引き返したり、回り道をする、また入り口が見えなくなってしまう。ぜひ勇気を持って、この入り口を潜ってください。

菜々さんは、吟行は一期一会だと句に詠まれました。会社の親睦旅行などで訪ねた場所は、時間の経過とともに記憶が薄れていきます。けれども、

吟行で訪ねたところは、景色やその土地の風土、出会った人々等々、自分でも不思議なくらいによく覚えていくものです。そして、そのときどきに詠んだ作品をあとで鑑賞していると、訪ねたときの情景が実に鮮明に蘇ってきます。

これらのよき思い出や人と人との関わりはお金では買うことの出来ない宝物、財産です。苦しいとき、悲しいとき、弱さを覚えるとき、その時々これらの宝物が慰めとなり励みとなり支えてくれることを僕は多くの先人たちの生き様を通して教えられました。

体力や健康が守られる限り、互いに切磋琢磨してよき俳句ライフを全うしましょう。私たちが築いた宝物は必ず後の人たちにも継承されることを私は信じています。

二〇一三年七月七日

老鶯や 一期一会の旅の座に

みのる

